

認定NPO法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより

Museum Watatsuminokoe Newsletter

No. 16
2022.5.31

戦没学生の文章で「平和を訴える」 わだつみのこえ記念館の特色

館長 岡田裕之

わだつみのこえ記念館は今年で開館以来十六年目を迎える。記念館の設立は母体である日本戦没学生記念会（通称わだつみ会）発足の一九五〇年に定めた、記念事業の一つであった。

記念会は「学徒出陣五〇周年」を刻して一九九三年、学芸への志を絶たれて戦死した学徒兵の記録を後世に伝えるべく、改めて記念館の設立を会内外に訴えた。こうして二〇〇六年十二月一日（不戦の集い）、現在地に記念館を開館した。記念館は「戦没学生の悲劇を繰り返さない」とした記念会の平和行動と記念事業の結晶である。

本年、冷戦後長らく保たれてきた平和な国際秩序は、核大国で国連安全保障理事会の拒否権を持つ五大国のメンバーであるロシアが、自国の安全保障の範囲を近隣国に広げ、突如、ウクライナに軍事侵攻したために、崩壊した。これは一九三〇年代、国際連盟の常任理事国日本が、「東洋平和」を掲げて満州と蒙古に自国の「生命線」を設け、独立国中国へ攻め込んだ歴史を思い起こさせる。結末は明らかである。平和を保つために、

第二次世界大戦、満州事変以来のアジア太平洋戦争の記憶を忘れてはならない。

わだつみのこえ記念館の名称は、一九四九年刊行の日本戦没学生の手記『きけ わだつみのこえ』（以下『こえ』と略称）に由来する。同書は「原版」であり「初版」であるが、同手記の刊行を記念して発足した日本戦没学生記念会は一九六三年、『戦没学生の遺書にみる十五年戦争』を編集刊行した。後書は上巻を『こえ』とする下巻として光文社から刊行されたが、一九八八年、岩波文庫への編入にあたり、先に編入された『こえ』に続く『第二集・こえ』となる。こうして「原版」は『こえ・第一集』

となつて『第一集』『第二集』とも岩波文庫版となり、日本思想の古典の位置を定める。現在は、一九九五年に『第一集』、二〇〇三年に『第二集』がそれぞれ「新版」となり、岩波文庫版で普及している。

『こえ』はアメリカ占領下に日本に内在した『平和の訴え』を記録した。『第一集』は、1. 戦争と軍隊、軍国主義と学術・学芸は両立せず、鋭く対立すること、2. 家族愛・恋愛・



撮影/斎藤 尚義

親孝行の人間性と国家の求める自分の戦死の葛藤、苦悩、3. 人類の普遍性・共通性と「優秀な日本精神」なるものの独善、を記している。

『第一集』も『平和の訴え』を基調にするが、一九六〇年代初、主権を回復して国際社会に復帰した日本は、中国・韓国朝鮮・東南アジア諸国と直面する。そこで記念会は、先の戦争を一九三二年の満州事変から始まる「十五年戦争」と認識する。

「わだつみの悲劇を繰り返すな」の綱領は戦争被害を強調するだけで良いのか、日本人の戦死、戦傷、戦災の以前に、先の戦争は東アジア侵略から始まった。『第二集』は『アジア侵略の反省』を主題に新しい遺稿を軸にし、これに戦争直後の紙不足から割愛した『第一集』の遺稿を加えて、編集された。

『第二集』は、1. 中日戦争期の中国侵略の実態、2. 中国で戦う日本兵の空虚と中国兵の真剣さの対比、3. 恋人や家族への個人愛と祖国愛の狭間で敗勢の中で戦死する意味、を記している。『第一集』も手記は、日中戦争期―太平洋戦争期―敗戦後期の時期構成で歴史的に構成されていた。学徒兵は勤労青年と比べると、在学中には徴兵猶予があり、入隊後も

入館案内

開館日 月・水・金
(祝日・夏季・冬季休館あり)
時間 午後一時～四時
*団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。
入館料 無料
*エレベーターもあります。
*資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。
*アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」下車七分

兵卒身分を略して将校に進む陸軍幹部候補生や海軍予備学生の制度上の特権があった。さらに勤労青年兵士は僅かな給与から家族に仕送りするが、学徒兵はしばしば親に送金を求める。しかし、学徒兵は学習し、よく考え、戦局を分析して文章に記録する、若い知識人であった。学徒兵は勤労青年兵士と比べ思想内容の豊かな文章を遺した。ここで重要なのは、戦没学生の戦争への疑惑、批判の思想内容である。わだつみのこえ記念館は、文章・コトバで伝える遺稿の展示と解説を行う平和施設である。

記念館は『こえ』採録の一二名の遺稿をベースにしつつ、採録者以外の戦没学生遺稿を積極的に収集し（十九名）、朝鮮人戦没学徒兵の史料を展示している。

記念館はこれらの貴重な遺稿を原物・複写とも収集しており、記念館2Fにその一部が常設ガラスケース内に説明、展示されている（スペースの都合で時宜に展示替えを行っている）。

また、遺稿の展示、内容の解説に併せて、2F一隅に視聴、資料コーナーを設け、一九四三年の明治神宮外苑での学徒出陣壮行会の映像施設はじめ、各種映像資料、報道番組と

映画「きけわだつみの声」(新旧作品)を視聴できる。『こえ』各版および英独仏語訳各版も展示してある。なお、階段上の壁にある戦没学生の遺影を背に、本郷新制作の「わだつみ像」の彫塑（一九五〇年・原型エスキース複製）が設置されている。彫像は抵抗の左手を挙げようと試みるが成らず、空しく戦死した悲哀を右手に向けた伏目の顔で表現する。この彫像は開館十周年を記念して募金により建立された。

さらに、1Fに参考図書の本庫があり、研究者による利用の便宜をはかっている。また、未公開であるが七〇年間のわだつみ会史の史料があり、すでに研究論文作成に使用されている。わだつみのこえ記念館は、古典『こえ』に基づくわだつみ会の運動、運動から生まれたNPO記念館法人、の記念施設でもある。

『こえ』はともに応募稿による編集で、遺稿原本の収集による編集著作物ではなかった。また一九九五年「新版・こえ第一集」と二〇〇三年「新版・こえ第二集」も遺稿原文との照合は完全ではない。幸い、本記念館は、多くの遺族のご厚意により貴重な遺稿の寄託を得た。『こえ』に採録された文章のうち散逸したものは残念ながら非常に多いが、遺族にとっては保有する遺稿は「貴重な記録遺産」であり、宝物である。記念館はその寄託をお願いするのだが、所有権利者は遺族であるし、寄託先の希望もある。そこで原本は手許に、「複写（フोटोकピー）」を記念館に、というケースも出てくる。記念館はこの新しく収集し寄託を受けた遺稿から、戦後八〇年にふさわしい新しい『戦没学生遺稿集』を編むことが出来たらと願っている。

「学徒出陣の証言」の編集について

茂木 尚

私の伯父茂木忠は昭和二十年五月

十一日、零戦五二型に五百キロ爆弾を搭載して鹿児島鹿屋基地を出撃し特攻戦死を遂げた。享年二十三歳。昭和十八年十二月十日学徒出陣で海軍に入団し飛行訓練を開始したのは十九年六月、僅か一年未満の訓練で特攻戦死したことになる。当初は伯父の戦死に至る迄の足跡を辿るつもりだったが、同期の海軍第十四期予備学生の方々にお会いして多くの写真や資料を頂くうちに、これらを時系列に整理し記録として残すべきとの思いに至った。それがこの「学徒出陣の証言」である。以下、順を追って一部を紹介する。

「学徒出陣とは昭和十八年十月二日公布の勅令第七五五号『在学徴兵延期臨時特例』により学生に対する徴兵猶予を停止され、十月二十五日から十一月五日の間に実施の臨時徴兵検査に合格した者を十二月一日陸軍に入営、十二月十日海軍に入団させたことをいう。」「高松信夫（神商大）。徴兵猶予を停止された時は、「当時の世界情勢からいって、遅かれ早かれアメリカとは戦わなければならぬ状況だった。」「阿山剛男（早大）。」「悲壮も興奮もない。若さと情熱を潜め己の姿を見つめ、古の若武者が香を焚き出陣したように、心静かに行きたい。征く者の気持ちは皆そうである。」「市島保男（早大）。」「青天の霹靂とはこの事だ。私は慶応大学本科二年に進級したばかり。卒業後に行くと思っていた。」「三上英満

（慶大）」と思いは夫々である。

十月二十一日、小雨の降り続く神宮外苑競技場の出陣学徒壮行会には七十七校、行進用の三八銃が不足で各校百名程度が参加した。マスコミは大学生のことを「サボ学生」と言っていたのに、急に学徒とか若鷲とか言いだして『おだてるな』と反発して参加はしなかった。」「佐竹一郎（東大）」。

徴兵検査では海軍か陸軍かの希望調査があったが、海軍のスマートさ、飛行機の操縦に憧れた者も多く、「学校の教練で、幹候上がり前の教練教員の無教養、粗暴が嫌でたまらなかつた。」「長澤剛正（慶大）」、「陸軍の形式主義が嫌いであつた。軍人勅諭の棒暗記、人間より大切だというお馬様の相手、憲兵を含めてあの必要以上の威張り方も我慢できなかつた。」「平野仁右衛門（早大）」等の理由で海軍を選んだ学生もいた。出身地により横須賀、舞鶴、呉、佐世保の4海兵团に入団した。

海兵团に入団後「現代軍隊は強力化のために機械化されなければならぬ。現代の軍人は戦国の世の如き武士的なものではなく、むしろ優秀なる熟練工に近いものでなければならぬ。機械力、技術力の欠陥を補うための精神力高揚は、結局において戦力の衰退を導くものにほかならない。現代に必要なのは決して精神力ではない。卓越せる技術と機械力にある。」「林尹夫（京大）」と既に海軍の重大な欠陥を指摘している学生

がいた。「武山（横須賀）は海軍士官としてやっていく能力と体力があるかを見極める所。」「佐藤孝一（専大）」で、約一万八千名が入団し短艇、手旗、陸戦等九科目の訓練、試験を経て、飛行専修予備学生に合格したのは約三千五百名だった。

土浦の基礎教程は「士官としての訓育と飛行機乗りになるための基礎的な知識、体力を身に付ける所。」「佐藤孝一（専大）」で、モルルス信号、航空、水雷、砲術、物理等二十五科目を修了。操縦と偵察の選別には様々な適性検査があり、死相が出てくるかどうか「白髪の内容貌の怪しい人相見に手相や骨相を見られた時は、帝国海軍も地に落ちたとみんな笑ひあつた。」「柳井和臣（慶大）」。操縦は北浦、谷田部、豊橋、出水等へ、偵察は大井、徳島へ、鹿児島島の要務は土浦、滋賀、詫間、青島等全国各地に配属され実践訓練へと進んでいった。

中間練習機教程は一九年六月に始まり、操縦は赤トンボによる離着陸飛行から編隊飛行、特殊飛行へと進み、偵察は白菊、九〇機上練習機による通信、気象、電探、航法、射撃、爆撃等の訓練を行った。九月末に操縦は戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機、一式陸攻に分かれ、偵察は大井、徳島で実用機訓練に入った。術科教程を終えた要務は「直ちに第一線の実戦部隊に転出、多くの者がフィリピン、シンガポール、硫黄島等過酷な戦闘状態にある南方。」「長澤剛正（慶大）」に配属され、早くも十月には比島沖海戦で十一名が戦死した。

実用機教程が十月に開始したが「神ノ池では燃料がなく、ほとんど飛行訓練がなかった。十一月谷田部へ戻ったが、谷田部も燃料不足で翌年の一月まで飛行訓練がなかった。」「塚久四（東大）。他の航空隊も同じ状況の中、十二月二十五日少尉に任官した。昭和二十年二月戦局の急速な悪化により各航空隊で特攻の希望調査があつたが、拒否をできる状況になく、ほぼ全員が熱望が希望に○を付けた。」「俺達が特攻で死ねば本当に平和になれるのかどうか悩んだ。この戦争は正義の為のものではない。東洋平和、俺はそんなことの為に死ぬのではない。人間として、与えられた任務を全うすることが美しい生き方だ。俺はそこに死ぬ道をみつけた。」「佐々木八郎（東大）」と己の死の意義を問ひ、「安田弘道（慶大）」は戦争とか特攻とかは全く無縁の男、最後までフランス語の辞書と首つ引きで勉強していた。「小針文秀（拓大）」と出撃直前まで学生の自分を全うする中、四月六日開始の菊水作戦で百五十九名の第十四期予備学生が特攻戦死した。

二十年一月米軍がフィリピンのリオンガエンに上陸し、在比各航空隊はクラーク地区ピナツボ山麓に陣地を築いたが、「もともと海軍には陸戦で使用する火器類は少なく、拳銃や軍刀で戦うしかなかったが、戦死者の大半はマラリア等の伝染病と食糧不足による餓死だった。ここで飢え死にするくらいならと斬り込みを選んだ者もいた。」「寺尾哲男（早大）。」十四期要務の戦死者百六十名中百二十六名がフィリピンで戦死した。各航空隊は本土決戦の準備をしたが、「十五日の玉音放送は整列して聞きました。ジリジリと真夏の太陽が照りつけて暑く、何を言っているかわかりませんでした。」「だいたい終戦だというのはわかりました。みんな黙り込んでしまつて何も話していませんでした。」「リーダーは泣いていました。敗戦はなんとなく感じてはいました。」「時間が経つにつれショックがじわじわと広がってきて、気持ちのやり場がありませんでした。」「杉溪一言（東大）。」厚木基地で「帝国海軍は降伏せず」と徹底抗戦の騒動があつたがすぐに沈静化した。

「戦犯裁判があるから記録類は全て焼却、廃棄せよ。」「川井正（法大）」との命令で、残された記録が少なく戦後の調査は困難を極めたが、海軍第十四期飛行専修予備学生三千三百二十三名中、戦死は四百一十一名だった。「戦死した戦友は大きな、大きな人柱だった。それを無にしてはいけない。平和を守り続け二度と戦争をしない、それが戦死した戦友に対する誓い、それが私に課せられた使命だと思つている。」「小針文秀（拓大）」。この証言集は、海軍第十四期会報、短信、冊子、日記、手記から抜き出したものに十四期予備学生から直接伺つた証言を加え、写真三百二十七枚を掲載、三百ページのボリュームになった。学徒出陣とはどういうものであつたか、学生達がどんな思いで戦争に立ち向かつていったかを知る手掛かりに、また戦争の記憶を継承していく為の一助となれば幸いと思う。（文中敬称略）



茂木尚編「学徒出陣の証言」

常設展をみて

みんな若くして亡くなり、とても悲しい気持ちです。二度と戦争のないように祈ります。今の幸せの生活を大切にします。

(2021.5.15 板橋区 28歳 中国人)



はじめて訪れました。今、日本に戦争がないことがあたりまえではないということを感じました。私と年齢がほとんど変わらない学徒兵たちが、死ぬ意味、生きる意味を模索する様子が資料や手紙からひしひしと伝わり、胸がつまりました。今の生活に感謝をし明日からも丁寧に生きようと思えます。(2021.7.5)



授業の関連で訪れました。戦争に行つて死ぬことが国のなかではくつがえすことのできないものになっていて、個々人は抗えなく、戦死に対していろいろ苦悩していたことが、実際その人たちが書いたものから伝わってきて、戦争はなんのためにやっているのだろうか、今後戦争をしてほしくないという思いになりました。薄っぺらい感想しか書けないけれど、今後二度とこんな戦争がされないために自分たちができることは何かないのだろうかと思えるようになりました。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。(2021.7.5)



はじめて来ました。前からこうと思ったけど、コロナでなかなか来られなかったが来てよかった。若い学生たち、朝鮮の人たちも含めて、お国のためだとだまされ特攻隊や戦場に行かされてひどいと思った。また政府が憲法を改正しようとしている。絶対憲法改正には反対！ 再び若い人々を戦争にまきこもうとしている。戦争反対だ。若い人々を戦争にまきこむな！(2021.10.11)



『きけ わだつみのこえ』を20年前に読み、亡くなった方のためにも、一生懸命日本や世界のために学問しようと思えました。それができているかわかりませんが、今後も学問をずっと続け、後世のために自分がやれることをやっていきたいです。亡くなった方々の学問に対する強い思いに微力ながら応えるためにも。

(2021.10.27 御殿場市 40代 会社員)



数年前から「一度行ってみたい」と思っておりまして。ここに展示されている戦死者の方々は、全戦死者のごく一部。しかしもし戦死しておられなければ、日本の未来を背負っていかれるような優秀な方々だったはず。若くして亡くなられたことが何とも悲しいです。

私の父は大正15年生まれ。終戦の時は海

来館者の「感想ノート」より

軍兵学校で訓練中でした。戦争があつ少し長引けば、父はきっと戦死したでしょう。私もこの世に存在していませんでした。

自由と平和を熱望しつつ戦死された方々の思いを今、日本の生きる私たちはかなえているのでしょうか。彼らの死を無駄にせず生きていかねば、と思います。(2021.11.8)



前途ある若者たちが戦争の犠牲になったことに胸が痛みます。彼らの霊のためにも平和を希求する精神を持ち続けたいと思っております。どうか安らかに眠りください。(2021.11.8)



通るたびに気になっていました。平日の今日やっとこられました。私の曾祖父も戦争で亡くなりました。どんな思いだったろうと思いました。(2021.11.26)



お国のために死ぬことがよるこばしいこととされていた時代ですが、彼らの父母は本当は何を思っていたのか知りたいと思う時があります。今回直筆の遺品、手紙と映像を見てこれらの物には本人の思いだけでなく、それを受けとった家族の思いも含まれているのだと思います。自分と年代の人たちが戦争で亡くなっていて、彼らの人生がいかに短いものであったのかわかりません。日本の将来の発展に携わる予定であった若者が戦争で死ぬのはやるせないですし、今後もあってはならないことだと思いました。(2021.12.6 20代 女性)



以前から訪れたいと思ってました。今日やっと主人と参りました。お国のために若い優秀な青年たちが命をかけて戦ってくださり今の平和な日本があります。それを忘れずにずっと生きていきたいです。今週、山口県の回天記念館へ行くので更に思いを深めたいと思います。英霊たちに感謝して精進したいと思います。今後もこのような戦争を知ることができる所があり続けて欲しいです。(2021.12.11)



いつも通りから「わだつみのこえ」の看板をみていてとても気になっていました。子どものころ叔父の戦地から父母にあてた手紙を思い出しました。今日か明日か、いつ死ぬかも知れない戦地から父母の健康だけを願った言葉がづぶられていました。とても丁寧な文字、父母を敬った言葉づかいがとても印象的でした。たくさんの優秀な若い方の心情や願いが痛いほど伝わりました。当時のご家族のお気持ちはどんなにか苦しかっただろうと思います。

全体主義という言葉が心に残りました。

個人の幸福があつてこそその社会であつてほしいです。(2022.1.12)



自分とほとんど年齢の変わらない学生たちが、死ぬ意味や戦う意味を見いだそうとしている様子や、彼らの「生きたい」という強い欲求が手紙から溢れていて、心が痛みました。

特に印象に残ったのは、奥さんと子どもに向けて書かれていた手紙です。奥さんの名前を何度も何度も繰り返し書いていて、愛する人と一緒に過ごしたい、けれども戦いに赴かなければならない、という葛藤が滲み出ていました。また、手紙を受け取った方々の心情も推し量り、考えてしまいました。残された人々もやりきれない気持ちでいっぱいだったろうと思います。(大学生)



戦争が何を奪ったか、それを語り伝える手段は漫画・ドラマ・映画とたくさんあります。自身の体験は漫画「はだしのゲン」ですし、森山良子の「さとうきび畑の唄」も、丸木位里・俊「原爆の凶」など、直接多くの人に訴えかける力を持つのは、こうした様々な表現、広い意味でのアートだと思いますが、その発想源として必要となるのが、わだつみのこえ記念館が保存して守り伝えるような一次資料だと思います。(大学生)



戦没学生の思いが激しく表れている手紙はもちろん、兄弟の勉強の様子を聞いたり食料事情を心配している手紙が印象的だった。そういった現在でも日常的に話題とするようなことが、戦争中で死が身近な前線の学生の話題になっていたということによって、これまでより戦時中の話が自分に近づいたように感じた。(大学生)



「来館者感想ノート」には「前途ある優秀な青年」「こんな若くて」といった言葉がこれでもかと費やされていた。しかし「若くなければいいのか。優秀でなかったらいいのか」。こう問われて「もちろんそんなことはない」と彼らは言うだろう。だが、本展示をみた人びとが「感想」として無意識にそう書いてしまうことが、どれだけこの展示によって反省を迫られるべき類の無意識なのかということについて、こうして字数を割いておいてもよいだろう。



時代が変化しても、当時の一次的な資料へのアクセスが可能ならば、我々はいつでも原点に立ち返ることができる。戦没学生本人の記したものを博物館が保存し、一般に公開してくれることで、完全に当時の感覚を理解することは不可能だとしても、少なくとも戦争当時の当人の思いや状況を本人たちの言葉で知ることのできるありがたさを身に沁みて感じた。(大学生)

平和ミュージアムめぐり(9)

不屈館—瀬長亀次郎と民衆資料—

加藤 宣子

一九九六年から長い反対運動が続く辺野古に行くと、新基地建設が進む工事の現場を見て回ったり、抗議・阻止行動をする力ヌーチームをサポートしたりする抗議船が「平和丸」ほか数台ある。その中に「不屈」という抗議船がある。米軍支配下の沖縄で沖縄人民党を組織し、那覇市長・日本共産党衆議院議員となった瀬長亀次郎が生前好んで揮毫した「不屈」にちなむ抗議船だ。

とにより軍の圧力で辞任。第一回立法院議員総選挙でトップ当選を果たすが、選挙後の琉球政府創立式典で宣誓拒否したことで、占領軍からいらまれることになる。

一九五四年、沖縄から退去命令を受けた人民党員をかくまった人民党事件により逮捕・投獄される。出獄後の一九五六年那覇市長選に出馬、当選。占領軍出資の琉球銀行による那覇市への補助金と融資の打ち切り、貯金凍結の措置にたい、市政運営の危機に見舞われるが、市民の自主的な納税によって助けられた。これに対し占領軍と沖縄自民党は不信任決議を七度も提出するが不発に終わる。占領軍は一九五七年、高等弁務官ムーア陸軍中将が布令を改定し、五四年の投獄を理由に、被選挙権をはく奪した。市長在任期間は一年足らずであったが、那覇市政をめぐる米軍との攻防は、沖縄県民の絶

大な支持を呼んだ。

一九六七年、瀬長布令が廃止されたことで、被選挙権を回復、翌年立法院議員となる。一九七〇年の沖縄初の国政参加選挙で衆議院議員に当選し、以降七期連続当選を果たした。日本共産党に所属した。一九九〇年政治活動を引退し、二〇〇一年死去。

常設展は、「亀次郎の生い立ち」「米軍への宣誓拒否」「人民党事件」「那覇市長時代」「国会での活躍」の構成となっている。

また復帰五〇年を迎えた今年、一年にわたり復帰五〇周年企画展を展示替えしながら展示するそう、第一弾は「米軍統治下の沖縄」(二月二日〜四月二十八日)、第二弾は「日本復帰後の沖縄」(五月一日〜八月一日)。

一〇年ほど前に「沖縄戦後ゼロ年」と言ったのは、沖縄の芥川賞作家、目取真俊だが、沖縄はいまだに戦争が終わっていない。瀬長亀次郎が生きた時代も今も、沖縄は「不屈」に闘い続けている。

開館時間：午前10：00〜午後5：00(入館は午後4：30まで)

休館日：毎週火曜日・年末年始(12/28〜1/3)

入館料：大人500円/大・高校生300円/中学生以下無料

障がい者無料(介助者1名無料)

65歳以上400円/団体(10名以上)400円

所在地/交通案内：〒900-0003 那覇市若狭2丁目21-5

TEL：098-943-8374

*バス路線

○2番。3番。5番。15番。45番。久米孔子廟前から徒歩4分

○市外線・農林中金前 バス停から徒歩10分

○モノレール・県庁前駅から徒歩15分

「ネットワーク」短信

◆文京ミュージズネット

文京区内にある博物館・美術館・庭園など三五施設(当館も加盟)の合同イベント「文京ミュージズフェスタ二〇二二」(二月一六日〜一八日、ギャラリースピック)に当館は

戦没学生八名(石岡俊蔵、稲垣光夫、田中敬治、長谷川信、松永茂雄、柳田陽一、吉村友男、鷲尾克巳)の遺稿(画像)・遺影・履歴を収めたA2

パネル四枚を出展。来場者三七〇名。会場アンケートでは、「印象に残った

パネル展示二四」のうち、当館のパネルが一二と最多でした。

◆平和のための博物館・市民ネットワーク

二〇二二年度全国交流会は一月二〇日オンラインで開催。

◆主催集会

「不戦の集い」(二月一日)を対面・オンラインで開催。記録映画「学徒出陣」上映と講演「荻野富士夫「よみがえる戦時体制」大学と教育をめぐって」。参加者四八名。

◆教育機関への協力

東京大学教育学部「博物館概論」。

◆マスメディアへ協力

・NHKテレビBS1スペシャル「山本五十六と「開戦」」

・上毛新聞社「こども新聞」

・『月刊部落解放』「東京ワールドワーク」

◆来館者

*昨年度は新型コロナウイルス感染予防のため四月〜九月、二〇二二年一月〜三月まで休館したので、

開館日は三七日、来館者は一〇二名でした。

*ふだんの開館日は月・水・金の一時〜四時ですが、団体の場合は、曜日・時間等ご相談に応じます。解説もいたしますのでお申し込み下さい。

◆ご寄付

記念館の維持・発展のために会費(維持、賛助)やご寄付をお寄せください。また来館の折にカンパしてください。皆さま、ありがとうございます。

当館の管理・運営を担う「法人」理事は、設立以来無報酬で諸経費の節約に努めておりますが、維持・運営等に多額の費用が必要です。どうか今年度もご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

◆役員・スタッフ紹介

法人理事長・渡辺總子、記念館館長・岡田裕之、常務理事・岡安茂祐、奥田豊己。ふだんの記念館運営は岡田裕之、奥田豊己、深澤かよ子、渡辺總子があたっています。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。(W)

短信

◆主催集会

「不戦の集い」(二月一日)を対面・オンラインで開催。記録映画「学徒出陣」上映と講演「荻野富士夫「よみがえる戦時体制」大学と教育をめぐって」。参加者四八名。

◆教育機関への協力

東京大学教育学部「博物館概論」。

◆マスメディアへ協力

・NHKテレビBS1スペシャル「山本五十六と「開戦」」

・上毛新聞社「こども新聞」

・『月刊部落解放』「東京ワールドワーク」

◆来館者

*昨年度は新型コロナウイルス感染予防のため四月〜九月、二〇二二年一月〜三月まで休館したので、

開館日は三七日、来館者は一〇二名でした。

*ふだんの開館日は月・水・金の一時〜四時ですが、団体の場合は、曜日・時間等ご相談に応じます。解説もいたしますのでお申し込み下さい。

◆ご寄付

記念館の維持・発展のために会費(維持、賛助)やご寄付をお寄せください。また来館の折にカンパしてください。皆さま、ありがとうございます。

認定NPO法人 わたつみのこえ記念館

発行日 2022年5月31日

発行 わたつみのこえ記念館

東京都文京区本郷5-29-13

TEL: 113-0033 赤門アビタシオン1階

電話/Fax 03-3815-8571

E-mail: info@watatsuminokoe.org

URL: http://www.watatsuminokoe.com

郵便振替001800-3-612451